

長岡技術科学大学 学 泉 伸 司
正 原 田 秀 樹
正 桃 井 清 至

1. はじめに: 都市下水の消化汚泥を用いたコンポスト化回分実験を行ない、排ガス中の O_2 , CO_2 濃度を連続測定することによって、熱収支から発酵熱特性を評価した。この場合、汚泥中および発生水中にトラップされた無機炭素(IC)量を補正した呼吸商を用いることによって、実際の発酵熱をよく再現することができたので報告する。

2. 実験装置および方法: 図-1に実験装置を示す。発酵槽は、内径30cm、高さ90cm、有効高さ50cm、有効容積35ℓで、外気温の影響を少なくする為、約8cmの断熱材で覆っている。サンプリング孔は、温度センサーと同じ高さに、下段(下から15cm)、中段(30cm)、上段(45cm)と設置している。また、排ガス中の蒸発水を系外へ排出する為凝縮水捕集器を設けている。各温度および排ガスの性状は連続的に測定し、記録した。3種類の消化脱水汚泥を用いて実験を行なった。表-1に実験条件を示す。Run 1では、槽内混合物温度は1点、排ガスは O_2 濃度のみ測定し、Run 2, 3では、槽内混合物温度は3点、排ガスは O_2 および CO_2 濃度について測定した。また、各Runとも、発酵期間中にサンプリングを行ない、含水率、強熱減量、 μ , COD_r , BOD_5 , $T-N$, $T-C$ (CNコーダー)の項目について、分析を行なった。なお、Run 3では、発酵過程で試料中にトラップされたICについても、経時的に測定した。

3. 結果および考察: 図-2にRun 1の各温度、排ガス中の O_2 濃度発生水量の経時変化を示す。 O_2 濃度の減少に伴い槽内温度は上昇し、50時間で O_2 は、10%程度減少し、コンポスト温度のピークと対応している。図-3にRun 2の O_2 消費量、 CO_2 生成量、見かけの呼吸商を示す。 O_2 消費量と CO_2 生成量はほぼ同様の経時パターンを示し、見かけの呼吸商は発酵期間を通し、約0.53(CO_2 mol/ O_2 mol)とほぼ一定であった。図-4にRun 2の各温度、発生水量の経時変化を示す。槽内混合物温度において、下段、中段、上段にかなりの分布が認められる。しかし、後述するように熱収支計算では簡略化の為、槽内混合物の温度勾配は無視ものと仮

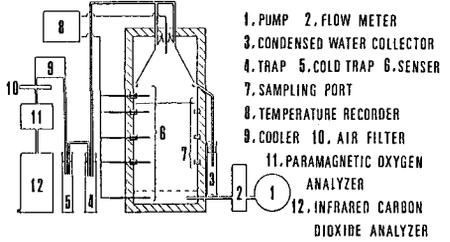


図-1 装置図

表-1 実験条件

Run No.	Substrate	Run 1		Run 2		Run 3	
		Case	Temp. (°C)	Case	Temp. (°C)	Case	Temp. (°C)
Total weight	kg	4.25	10.00	4.25	10.00	4.25	10.00
Dry Weight	kg	1.96	6.05	6.61	3.25	7.95	3.61
Moisture	%	53.6	39.19	33.84	67.54	62.40	64.78
Ignition Loss	%	32.47	34.24	37.59	32.35	34.11	42.47
IC	g/kg	64.69	7.20	6.96	6.81	6.29	6.54
IC	mg/kg	231.5	44.3	96.0	81.1	32.5	75.5
IC	mg/kg	280.9	54.0	113.0	87.0	33.6	83.0
IC	%	3.71	1.56	1.00	1.36	1.29	2.86
C/N ratio		17.20	16.97	18.07	18.59	18.66	21.23
C/P ratio		7.22	6.14	6.28	7.13	6.97	6.55
Inorganic Carbon	mg/kg	-	-	-	-	-	-
Assessment Quality	g/kg	-	-	0.794	-	0.734	-
Assessment Rate	%	-	-	54.15	-	61.9	-

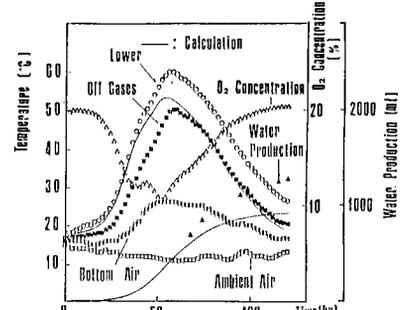


図-2 Run 1の経時変化

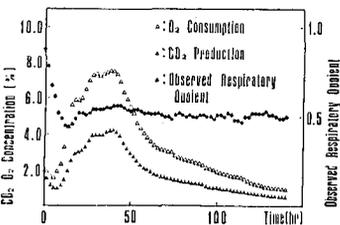


図-3 Run 2のガス組成

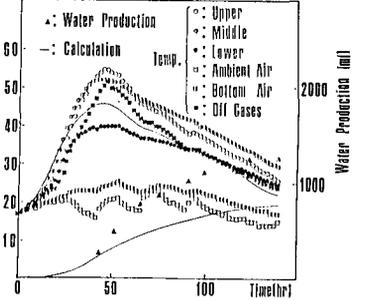


図-4 Run 2の各温度

